

大分県立美術館のシンボルマーク決定について

平成25年 4月11日

1. シンボルマーク

2. シンボルマークのイメージについて

大分県立美術館のヴィジュアル・アイデンティティは、

同館の特徴である可変性、拡張性、多様性を象徴的に視覚化、知覚化したものです。

時代を超える普遍性を有すると同時に、親しみやすさを目指したデザインです。

シンボルマークのエレメントは、大分県立美術館の欧文表記「Oita Prefectural Art Museum」の頭文字 O・P・A・Mを用いた「OPAM」(オーパム)です。

大分の発展をイメージし、Oの文字は太陽を彷彿させる円のフォルムに、

Aの文字は天に延びるような長体にし、動きのあるシンボルマークを設計しました。

有機的なセリフを持つローマン体オリジナル欧文書体のシンボルマークは、

レタリングによる工芸的な技を駆使し、人の手技による緻密さと温もりを取り入れました。

平野敬子×工藤青石(コミュニケーションデザイン研究所)

3. 和文ロゴタイプ(オリジナル書体)

大分県立美術館

4. 欧文ロゴタイプ(オリジナル書体)

Oita Prefectural Art Museum

大分県立美術館のシンボルマーク決定について

平成25年 4月11日

5. 制作者

CDL 平野敬子×工藤青石（コミュニケーションデザイン研究所）



平野 敬子（ひらの けいこ） コミュニケーションデザイン研究所 所長
デザイナー / ビジネスマン

1959年兵庫生まれ。1997年HIRANO STUDIO設立。2005年工藤青石とともにコミュニケーションデザイン研究所（CDL）を設立。グラフィック、プロダクト、空間、ブランディング、展覧会の企画・構成など、多様な領域でデザインを具体化する。

〈主な仕事〉東京国立近代美術館のシンボルマーク・ロゴタイプ・VI計画、同美術館60周年記念事業のシンボルマークを中心とした一連のデザイン、資生堂「qiora」のブランディング、NTTドコモの携帯電話「F702iD所作」のトータルデザイン、白を極めたファンシーペーパー「ルミネッセンス」開発デザイン、鹿島建設K-Towerの鏡のデザイン、展覧会「時代のアイコン」展、「デザインの理念と実践」展の企画・構成・空間デザイン・書籍の編纂など。

〈主な受賞〉毎日デザイン賞、東京ADC賞、NewYorkADC金賞、第15回亀倉雄策賞、JAGDA賞、日本パッケージデザイン大賞金賞、IFデザイン賞。

www.cdlab.jp

工藤 青石（くどう あおし） コミュニケーションデザイン研究所 代表
デザイナー / クリエイティブディレクター

1964年東京生まれ。1988年東京芸術大学卒。同年資生堂入社、1992年から4年間パリ勤務。独立後2005年平野敬子とともにコミュニケーションデザイン研究所（CDL）を設立。グラフィック、プロダクト、空間、ブランディング、展覧会のプロデュースなど、多様な領域でデザインを具体化する。

東京芸術大学非常勤講師。

〈主な仕事〉「SHISEIDO MEN」「IPSA」「qiora」など化粧品デザインのデザイン、「資生堂プロフェッショナル」ブランドのトータルディレクション、銀座ハウスオブセイドウのインタラクティブな装置「アーカイブテーブル」プランニング・デザイン、三越「ギフトプロモーション」のクリエイティブディレクション、竹尾・日清紡の紙「気包紙」開発デザイン。

〈主な受賞〉毎日デザイン賞、東京ADC賞、東京ADC会員賞、JAGDA賞、日本パッケージデザイン大賞4回、米国建築家協会ニューヨーク最優秀デザイン賞、ID-Award。

www.cdlab.jp